

角笛吹く子

小川未明

青空文庫

町の四つ角に立つて、一人の男の子がうろろしていました。子供ははだしで、足の指を赤くしていましたけれど、それを苦にも感じないようでありました。短い黒い着物をきて、延びた頭髪は、はりねずみのように光っていました。

子供は、このあたりのものではないことはよくわかっています。前には、こんな子供がこの付近で遊んでいたのを、だれも、見たものがないのでありましょう。きつとどこからやってきて、帰る途を迷ったにちがいありません。けれど、なかなかきかぬ気の子供は、それがために、けつして泣き出すようなことがなかったのです。

町には、もう雪がたいてい消えかかっていますけれど、なおところどころに残っているのが見えました。子供は、車がいたり、きたりしますの目を円くして、おびえながらながめていましたが、あまり自分に注意をする人もありませんので、やっと安心したように、いくらかおちついたらしいようすでありました。ちようど山がらすが里に出てくると、里に棲んでいる、たくさんのからすに、たかつていじめられるように、子供には、町を通る人間が怖ろしかったのです。

だれも、自分に気を止めるものがないと知ると、子供は、そのそばにあつた時計屋の店

さきにゆきました。その店には、ガラス戸の内側に、寶石の入った指輪や、金時計や、銀の細工をしたえり飾りや、寒暖計や、いろいろなものが並べてありましたが、中にも、一つのおもしろい置き時計が目立っていました。

それは、ふくろうの置き時計で、秒を刻むごとに、ふくろうの眼球が白くなったり、黒くなったりしたのです。

そして、時計の針が白い盤の面を動いていました。そのときはまだ、昼前でありましたが、著しく日の長くなつたのが子供にも感じられました。

南の方の空の色は、緑色にうるんで、暖かな黄金色の日の光は、町の中に降つてきました。それを見上げると、子供は、いつかこの町を通つたことがあつたのを思い出しました。そのときは、雪が盛んに降っていました。北風がヒューヒューと鳴つて、町の中は、晩方のように、うす暗かったです。日が短くて、時計の針が、白い盤をわずかにばかりしか刻まないうちに、もう日が暮れかかるのでありました。

人々は、みんな吹雪の音に脅かされて、身をすくめ町の中を歩いていました。じきに暗くなると、どこの家も早くから戸を閉めてしまつて、町の中は死んだようになりました。その後は、まったく風と雪の天地で、それはたとえようのないほど、盛んな景色でありま

した。子供はそれを忘れることができなかつたのです。子供は、こうした吹雪を見るのが大好きでした。そして、黄金色の日の光を見ると、不思議に気持ちが悪くなつて、頭痛がしたのであります。

子供は、ふくろうの眼球が、白くなつたり黒くなつたりするのを、もう見飽きてしまいました。そして時計屋の店さきを離れますと、また、どっちへ歩いていっていいかわからずに、うろうろとしていたのであります。

いくら気の強い子供でも、いまは泣き出しそうな顔つきをせずにはいられませんでした。どっちへいったら、自分の家へ帰られるだろうかと思つたのです。

このとき、あちらから、真つ黒の頭巾を目深にかぶつて、やはり黒い着物をきた、おばあさんがつえをついて歩いてきました。そして、町の四つ角に、ぼんやりと立っている子供を見つけますと、

「おまえは、こんなところにいたのか。」といつて、子供の着物のそでを引つ張りました。「おばあさん、もう家へ帰りたい。」と、子供は泣きだしそうな声でいきました。

「ああ、帰ろうと思つて、おまえをさがしていたのだ。」と、おばあさんは答えました。子供は、黙つて、はだしのままおばあさんに連れられて、田舎路の方をさして歩いて

ゆきました。

あちらの森では、からすがやかましくなっていました。

「ほんとうに、やかましくからすがないている。あれは、きつと里のからすだ。私たちをみつめて、鳴いているのだ。山がらすならあんなになきはしない。」と、おばあさんはいました。

「おばあさん、からすが怖いよ。」と、子供は泣きだしそうな声でいいました。

「ばかな子だ。そんな弱いことでどうする。からすがきたら、私がつえでなぐつてやる。」と、おばあさんは答えました。

子供は、からすのなっている森の方を振り向きながら、おばあさんに連れられてゆきま

した。
村にさしかかると、まだ田にも圃にも、雪がところどころ残っていました。町よりは雪が多かったのです。そして、村の子供らが、雪の消えた乾いた往来で、こまをまわしたり、鬼ごっこをしたりして遊んでいました。

その子供らの声を聞きつけると、子供は、怖ろしがつて足がすくんでしまった。

「おばあさん、みんながいじめるから怖いよ。」と、子供は、前へ歩こうとはしま

せんでした。

おばあさんは、当惑(とうわく)そうに子供(こども)の手(て)を引きながら、

「先(さき)がなんといても、おまえは黙(だま)つていれればいい。もし、あの子供(こども)らが口(くち)でいうばかりでなく、おまえをなぐるようなことをしたら、私(わたし)が、このつえでそいつをなぐつてやる。」と、おばあさんはいいました。

子供(こども)は、おばあさんの蔭(かげ)に隠(かく)れて、みんなの遊(あそ)んでいるそばを、逃(に)げるようにしてゆきすぎました。

「やあい、どこかの弱虫(よわむし)め、やあい。」と、後ろ(うしろ)の方(ほう)で子供(こども)らが悪口(わるくち)をいいました。

「弱虫(よわむし)のくせに、はだしでゆくやあい。」と、また子供(こども)らがいいました。

おばあさんの蔭(かげ)に隠(かく)れて、子供(こども)は耳(みみ)の根(ね)まで真(ま)つ赤(か)にしながら、黙(だま)つて、恥(は)ずかしがつていました。

「おまえは、いい子(こ)だ。よく黙(だま)つていた。それでこそおまえは、ほんとうに強(つよ)い子(こ)なんだ。」と、おばあさんは、強(つよ)いけれど、また一面(めん)には臆(おく)びよう病(びょう)などところのある子供(こども)の頭(あたま)をなでていいました。

二人(ふたり)は、さびしい、あまり人(ひと)の通(とお)らない田舎路(いなかみち)を、どこまでもまっすぐに歩(あ)りてゆき

ました。すると、あちらから、一人の百姓が、二頭の羊を引いて、こちらにきかかりました。これを見ると、子供は、また、怖ろしがりしました。

「おばあさん、怖い。」と、子供は泣き声を出していました。

「なにが怖いことがある。あれは羊だ。草を食べさせに百姓がつれてゆくのだ。よけてやれば、おとなしく前を通つてゆく。」と、おばあさんは答えました。

路の両側には、雪が消えかかつて、青い草の出ているところもありました。けれど、だんだんと進むに従つて、雪は多くなつたのであります。

おばあさんと子供は、路の片端によつて、百姓と羊を通してやりました。

二頭の羊は、仲よく並んで前を過ぎました。後から百姓がゆきました。

「これから先は、だんだん雪が深くなるばかりだ。」と、百姓は通り過ぎるときに、二人に向かつて知らせました。

二人は、また、その路を北へ、北へと歩いてゆきました。やがて、路は、広い野原の雪の中につづいていました。広い、広い、野原はまったく白い雪におおわれています。子供はその雪の中を、元氣よくおばあさんの先に立つて、はだしで進みました。

北の地平線は、灰色に眠つていました。まだ、そこには春はきていなかった。

「おばあさん、もう家が近くなつた。」と、子供はいいました。

「ああ、もうここまでくればだいじょうぶだ。」と、おばあさんも答えました。

このとき、子供は、懐の中から角笛を取り出しました。そして、北の野原に向かつて、プ、プー、プ、プー、と吹き鳴らしたのです。すると、たちまち、無数のおおかみが、どこからか群れをなして、雪をけたつて駆けてきました。子供は、その中の一頭に早くも飛び乗りました。そして、南の空を見返りながら、太陽に向かつて威嚇しました。すると無数のおおかみは、等しく太陽に向かつて、遠ぼえをしたのであります。その声は、じつにもものすごかつた。広野に眠っている遠近の木立は、みんな身震いをしました。寒い風が急に北の方から起こつてきて、雪がちらちらと降つてきました。見ると、さつきまで、つえをついて、黒い頭布をかぶっていたおばあさんは、じつは魔物であつたのです。黒い頭布と見えたのは、大きな翼をたたんで、その頭を隠していたからです。たちまち、魔物は、大きな翼を飛ばして、大空に舞い上がりました。子供が角笛を吹いて、北へ北へと、おおかみの群れとともに駆け去る頭の上の空には、黒雲がわいて、雷がとどろいていたのであります。

南の空からはしきりに、金色の箭が飛んできました。けれど、ここまで達せず、み

んな野原のの上うへに落ちおてしまいました。
すると、そこには、雪ゆきが消きえて、下したからかわいらし
い緑みどり色の草くさが芽めをふきました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「童話」

1921（大正10）年3月

※表題は底本では、「角笛《つのぶえ》吹《ふ》く子《こ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

角笛吹く子

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>